

面

創刊50周年記念号

115

バガテルⅧ～恋を愛を、花よ～

網野月を

恋心何処へ行つたか石路の花
指輪はしない主義ですクリスマス
春に待つ春の向うに在るものを
三月や似合う花より好きな花
好きだけど苦手な奴と短き夜
近い近い二つの心臓遠花火
恋人よ秋とは赤くなることか
水平を演じて久し赤ワイン
告白を受けて帰し娘のクリスマス
愛してるって不思議な言葉薺摘む

わが男

池田澄子

初春の冷まして冷ましすぎの白湯
拝聴の目の端 軒端の雪霰
霜の声あるいは枕のくるしむ音
昼を灯して八重の椿のような眠たさ
わが男なにさ仔猫に猫撫で声
マニキュアや明日鶯に逢えますよう
見て見ると諸葛菜どち菜の花どち
卒業のきゃーきゃー制服のプリクラ
聖金曜日とは何する日さくら散る
花吹雪あの人生きていたつけが

春風駘蕩

北上正枝

繭玉や少女に眩しいほどの肌
寒風裡いちづに動く指の先
寒牡丹睡くてならぬ母との距離
踏み出して爪先沈む薄氷
朝戸開け胸元に囁りをきく
ぎりぎりに屈んで摘み菜する気分
鎖骨より伸びる首すじ葱坊主
裏側が気掛りな壁春隣
鶯や祝のテーブル丸く拭く
春風駘蕩人それぞれの歩幅かな

日暮まで

北川 美美

夏野から去年の返事を待ちわびる
光茫の夏野に誰も入るまじ
夏の野に赤い眼をした犬をみた
濁流や夏野の脇をとほりけり
割れたての石の息吸ふ夏野かな
父に似た夏野に寝転ぶ日暮まで
夏野にて空の淋しさ見てゐたり
やはらかき夏野に鎖あづけおく
夏の野のうねりにおろす懼ひとつ
水のある星が生まれて夏野あり

平和

高橋 龍

我などひとりよがりや夏野原
耶蘇墓に父は眠りぬ赤のまま
キリスト者弘達雁の空仰ぐ
半分こお合いこ月の月島に
神もする自問自答を日向ぼこ
一日の長を重ねて年用意
年寄に長幼の序あり梅の花
戦争を育てる平和梅白し
頑として動かぬ鯰雁帰る
パソコンに鴉を集めゴツホ死す